

美の殿堂の 85 年 大阪市立美術館の展示室

解説シート

はじめに

大阪市立美術館は改修工事のため、来年度よりしばし休館する予定です。この改修工事は展示室内にも及ぶ大規模なものになる予定であることから、今回は普段あまり注目されることのない展示室と展示ケースとをご覧いただく企画をご用意いたしました。

大阪市立美術館の歴史

大阪市立美術館は昭和 11 年（1936）にようやく開館を迎えることができました。市会における美術館建設の決議から世界恐慌、市の財政難、室戸台風など幾多の苦難を乗り越えて足掛け 37 年目のことでした。

住友吉左衛門氏より本邸敷地の寄贈を受け、建築の実設計にあたったのは大阪市土木局建築部営繕課の面々（課長 波江悌夫・技師 伊藤正文・技手 渡辺久雄）です。当時流行の帝冠様式とは一線を画す、土蔵を意識した近代和風建築は、戦前の大型美術館の貴重な遺構として平成 27 年（2015）に登録有形文化財（建造物）に登録されました。

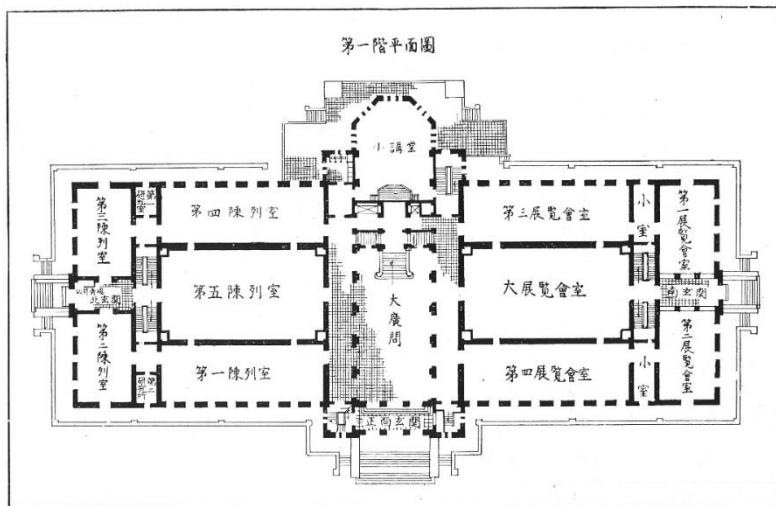


図1 本館1階平面図（開館当初）

上に掲示したのは開館当初の当館1階の平面図です。中央ホールを「大広間」と呼ぶのも時代を感じさせます。今回ご覧いただくのは、上図の第五陳列室・第一陳列室・第二陳列室です。いずれも開館当初の面影を残します。「陳列室」とは所蔵品・寄託品を陳列する展示室で、現在のコレクション展会場といたところ。対して南館の「展覧會室」は現在で言うところの団体公募展への貸会場を開催する展示室で、現在の地下展覧會室や特別展会場という分けでした。では、各室の見どころをご紹介します。

彫刻室（第五陳列室） 420㎡

かつては天井のガラスから降り注ぐ自然光によるトップライト採光が魅力の大空間でした。右に掲示した開館当初の写真を見ると、近畿周辺の社寺より寄託された仏像群が林立する様は圧巻です。戦後、各社寺で収蔵庫・宝物館等が建設されるに及び、多くの仏像は本来の居場所へ帰っていきました。また、連合国軍に接収を受けた際にはバスケットボール専用コートとして利用されたことも、この展示室を語るうえで欠かすことのできない歴史の一部です。



図2 開館当初の第5陳列室

今回、仏像のかわりにこの展示室内に林立しているのは開館当初から使用されている展示ケースです。当初はケースの天井もガラス張りでした。やわらかい自然光のもとでの作品鑑賞は人工光源下で鑑賞する現在とは大きく異なる印象をもたらしたことでしょう。その後、紫外線の有害性が知られ、作品の保存環境や一定した展示効果が追及されると、自然光下での展示は難しくなりました。天井の採光用のガラスもすべて塞がれ、現在の照明は基本的に人工光源によっています。この展示ケースも電化され、外装の再塗装もあって当初よりも幾分不格好になってしまったのが残念ですが、85年作品を展示し続けている働きものたちです。

第1展示室（第一陳列室） 280㎡

この展示室の壁には窓が開けられ、やはり外光が射し込む明るい空間でした。現在では窓ガラスをふさいで外光を閉ざすことで、室内の保安をはかり、温湿度の調整も簡便化しています。写真は開館当初の展示室で、ここに写された展示ケースが、先ほど彫刻室でご覧いただいた展示ケースの若かりし頃の姿です。どうです。すっきりと美しいでしょう。ガラス板で仕切る上下二段の展示も今は行いません。さて、見どころの一つは、展示室の扉の枠。周囲にはモールをあしらひ、上部に「第〇陳列室」の表札があります。え、読めない？ 右から読んでください。戦前の建物であることが実感できます。

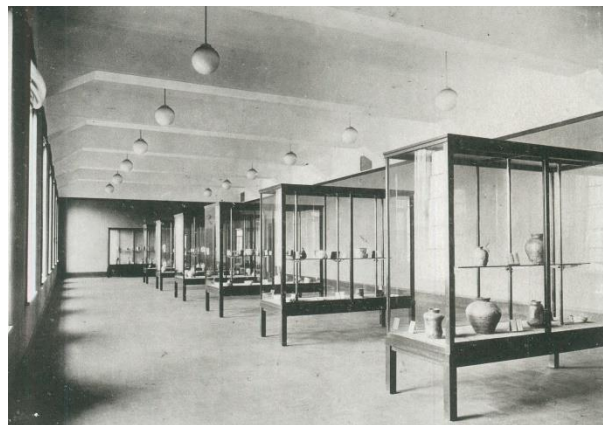


図3 開館当初の第1陳列室

第2展示室（第二陳列室） 150㎡

この展示室ではあえて照明を落とし、ケース内のみ点灯しています。展覧会では「会場が暗い」とよくお叱りを受けます。これには作品鑑賞に集中していただきたいという思いや、作品保全のために照度を落とさざるを得ない場合など様々な理由があります。今回、部屋のヌシのように暗闇に浮かぶ展示ケースは、開館当初も展示室中央に鎮座していました。実は、展示する作品を選ぶなかなか使いにくいケースです。いえいえ、ケースが悪いのではなく、使いこなせない私たちの力量不足こそが問題なのです。ところで、この展示ケースにも名前があります。その名も「Fケース」。もちろん、覚えていただく必要はありません。



図4 開館当初の第2陳列室

おわりに

今回は美術館の85年の歴史に感謝しつつ、あえて作品を展示せずに普段は脇役の展示室と展示ケースをご観いただきました。ご紹介した展示室・展示ケースには、これまで国宝・重要文化財をはじめ多くの名品が展示されてきました。壁面も名画の数々がいろどってきました。ご覧いただいた展覧会のご記憶は様々でしょう。どんな作品を思い浮かべましたか？ また、どんな作品がこの展示室、展示ケースに映えるとお考えですか？ 思い出に浸り、これからの理想の展覧会に思いを馳せる。この企画がそんな機会となりましたら幸いです。

最後に、おそらく今度の改修工事でその役目を終える展示ケースたちにもねぎらいの言葉を。

ありがとう、Fケース。